定年退職おめでとうございます，そして感謝

人間科学部心理学科長　吉　田　弘　道

藤岡新治先生は，1986年（昭和61年）に商学部に教養心理学担当の講師としてご入職されました。同時に心理学科で「心理測定」をご担当されました。そのころ，心理学科は文学部人文学科心理学コースであった時代であり，金城辰夫先生，東條正城先生，高橋零子先生，山上精次先生で構成されていました。

藤岡先生がご着任されて間もない1987年ころから，臨床心理士を要請する動きが臨床心理学の領域で起こり始め，（財）日本臨床心理士資格認定協会が1988年に設立されました。その後1996年（平成８年）から，臨床心理士を養成する大学院を指定する，いわゆる指定大学院制度が開始されました。藤岡先生は，臨床心理学領域の森和夫先生，岡部祥平先生，乾吉佑先生をはじめ，本学の心理学科の先生方と協力して指定大学院制度に対応する取り組みを重ね，1997年（平成９年）本学の大学院文学研究科心理学専攻の中において臨床心理学領域を明確にする形で，（財）日本臨床心理士資格認定協会が指定する第１種指定校となりました。想像するに，とても骨の折れる作業をされたのではないかと推察します。この流れが，現在の，大学院心理学専攻における，基礎系７人，臨床系７人という教員構成を作ることにつながっております。考えると，この構成は普通の大学には見られない構成であるといえます。しかし，同時に，本学の建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」とも相まって，専門職を育てようとする本学の意気込みが感じられもします。

おかげさまで，専修大学からは，これまでに数多くの臨床心理士が輩出され，多分野で活躍されておいでです。さらに，このとき作られた教員構成と臨床心理士のカリキュラムが，国家資格である公認心理師法の平成29年９月15日の施行をまって，公認心理師の受験資格を得るためのカリキュラムを平成30年度から学部と大学院において作るにあたって，大変役立っております。遅れて本学の心理学科に加えていただきました私としましても，大変感謝しております。

ところで，藤岡先生のご専門に触れますが，藤岡先生のご専門は心理査定学です。心理テストの中でも特にロールシャッハ・テストがご専門で，「ロールシャッハ・テストのスコアリング」研究，最近では「データベースを用いたロールシャッハ解釈システムの構築」研究もされておいでです。ロールシャッハ・テストの他にも，「色彩選択テスト」に関するご研究も長くされておいででした。藤岡先生は，何のために心理査定をするのかについて，いつもお考えになっていらっしゃいました。また，カウンセリングに造詣が深いこともあって，発達障害と他の精神疾患との鑑別をきちんとした上でのカウンセリングが重要であること，そのための心理査定であると，いつも学生に指摘されておいででした。これらのことを受けて，藤岡先生は，心理査定となると学生指導には厳しい面もお持ちでした。

ところで，心理査定学の研究に加えて，学生相談も藤岡先生のご研究のもう一つの研究領域といってもよろしいと思います。学生相談を行うために設置された学生相談室は，在学生を対象して，大学内に置かれている相談機関であり，藤岡先生は本学の学生相談室長を務められたこともあります。学生相談室が多くの大学の内に開設されるようになってきましたが，組織としては，学外に置かれている独立した相談機関と異なり，利点と難しさが同居している機関といえます。特に，学内での教員や他部署との連携がとても重要になります。これに関するご研究として，藤岡先生は「学生相談と連携」「学生相談と大学教育」「学生相談における相談構造」と銘打った論文を書かれておいでです。

学内での活動としては上記の学生相談室長を勤められたほかに，学外に開かれていて，外から来られた，子どもから成人までの心理相談活動を行う機関である専修大学心理教育相談室における活動があります。この相談室は，臨床心理士となるために大学院で実習教育を行う機関として設置されていますので，毎年10～14人の大学院

生が，週２日実習をしております。相談回数は，年間で2000から2500の間を動いております。この相談室には，常勤嘱託と非常勤のカウンセラーがおりますが，毎年大学院生が入れ替わりますので，流動的な性質をもっている組織であり，かなり統括するのに苦労する組織といえます。藤岡先生は，この心理教育相談室の室長を2007年と2008年の２年間，そして，2009～2014年の６年間，計８年間も勤められました。こんなに長く相談室長を勤められた先生は，藤岡先生の他にはいらっしゃいません。恐らく大変なご苦労があったことと想像しますが，しぶとく，根気強く対応される藤岡先生だからこそできたのではないかと思っております・

学生との付き合いについても触れることにします。上にも述べましたが，学生指導では厳しい面もあるのですが，卒業生，修了生を大事にされておいでで，毎年夏に開催される大学院修了生のOB会には，欠かさず出席されておいででした。卒業生，修了生も藤岡先生を大変に慕っており，何かと相談したり，近況報告したりしていたのではないかと思います。こういうところからも，心理臨床家としての藤岡先生の姿勢が見える気がします。

私は，2000年に心理学科に入職しました。そのとき，心理学科には，金城辰夫先生，東條正城先生，中谷和夫先生，山上精次先生，下斗米淳先生，中沢仁先生，岡部祥平先生，乾吉佑先生がおいででした。教養心理学担当の先生としては，藤岡先生が商学部，宮森孝史先生が経済学部，山下清美先生が経営学部，同じ時期に入職された村松励先生が法学部においででした。藤岡先生は，右も左もわからない私を陰に陽に助けてくださいました。しかし，私が学科長となった2014年に，藤岡先生は体調を崩されたことを理由に，翌2015年から特任教授になられるご判断をされました。そのことを藤岡先生から伝えられた時，私は大変ショックを受けました。頼りにしていた先生がいらっしゃらなくなるような気持ちがしたからです。しかし，先生のご健康のことを考えると，それもよいご判断ではないかと思いました。その後の藤岡先生は，時間ができたせいかお元気そうで，引き続きいろいろと助けてくださいました。あるとき私は藤岡先生の夢をみました。藤岡先生のご自宅に電話をかけると，１歳半くらいのお孫さんが出て，電話口で「モシモシ，モシモシ」と話すのです。そのうち奥様に代わられましたが，先生はお留守か何かで，結局藤岡先生とはお話しできませんでした。そんな夢でした。後日藤岡先生にこの夢のことをお伝えすると，ほぼ同じ年齢のお孫さんがいらっしゃるということで，「そりゃあ，話は通じないわな」と笑っておいででした。何か困ったことがありましたらまた夢を見ますので，藤岡先生，その時には電話に出てください。

藤岡先生，長い間，専修大学と心理学科のためにご尽力いただき，大変ありがとうございました。これからも体調にご留意され，お元気でお過ごしください。そして，専修大学心理学科の今後の発展をご覧になっていてください。